優 秀 賞

「　私の距離感　」

経営学科　4 年　大沼　光

2020 年は今まで誰もが経験しない年となった。3 月に卒業式中止の連絡、就職活動においては企業からの連絡が途絶えた。4 月に入り、学校からは授業中止の連絡が入り、5 月に入るとより感染者は増え、前期の間の授業は全てオンラインで行うという。政府から緊急事態宣言がなされ、突然全ての人が外出自粛を余儀なくされた。それから徐々に仕事や学校が始まる中、大学だけは対面での授業が始まるという連絡はなかった。そんな中、6 月になり就職活動に動きが出てきた。私が志望していた企業から連絡があったのだ。3 年時から就職活動のために少しずつ準備を行なっていたため、特殊な事態でも無事に就職活動を終えることができた。9 月になると、コロナウイルスの感染者が減少しているわけではないが、本大学の対面授業を開始できることとなった。久々に学校に赴き、人と会い、会話することができた。SNS が生活に欠かせないものとなった現代において、直接人と話せることがどれだけ嬉しいことなのか知った。

特殊な 1 年間を送って、私なりに人との距離感について考えた。感染予防のため、他人と話すときは距離をとり、不必要な会話は控えていた。しかし、家族や親しい友人等と話すときは気を遣わず、日常の会話を送っていた。当たり前なことのように思われるが、このような状況だからこそ感じる人の距離感について、その人との親しさがそのまま物理的距離として現れているのではないかと感じた。親しい中の人ほど話す距離が近く、時間も長い。親しくない人ほど距離が遠く、時間が短い。この特殊な事態だからこそ感じる人との距離感について、そのような視点で人との親しさがどの程度か測ってみるのも今年ならではの感じ方だったように思う。